

Title	児童の情緒問題に関する追跡的研究
Author(s)	濱崎, 和子
Citation	
Issue Date	
oaire:version	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/30321">https://hdl.handle.net/11094/30321</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について <a href="#"></a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	はま 濱	ざき 崎	かず 和	こ 子
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	2105	号	
学位授与の日付	昭和45年7月20日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	児童の情緒問題に関する追跡的研究			
論文審査委員	(主査) 教授	金子 仁郎		
	(副査) 教授	蒲生 逸夫	教授	関 悌四郎

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 〔目 的〕

近年、児童福祉法に基づく3才児健康診査が施行され、精神医学的な立場からの参加が要請される。従来、幼児期の情緒問題に関しては個々の児童の発達を継続的にとらえた観察や洞察あるいは臨床的な経験による知見が存在し、3才頃が人格発達上の転換期として重要な意味を持つことも広く認められている。しかし、前記の健診などの場合、所与の暦上の3才児に現象する何を異常とし、何を問題としてとりあげるべきかという問題があらためて問われねばならない。この問題解決の緒を把えようとして、筆者は本研究を行なった。

### 〔方法と成績〕

(A) 児童の情緒問題：実験的な状況設定下で同一児童の3才5才時点で健診を行ない、従来から問題視される現象についてその実状を検討する。検討項目：(1)排泄習慣(3才時には、成人の管理がなければ週2度以上の失敗ある者を重度未完成とし、それ以下受診前2月以内に失敗あった者を軽度未完成とする。5才時には軽度の者も遺尿問題児として扱う)(2)指吸いその他の口唇愛行動への執着。(3)自慰その他の身体玩弄への没頭。(4)吃音等の言語問題。(5)偏食、食思不振等の食事問題。(6)夜驚その他の睡眠に関するもの。(7)多少とも持続的な態度上の問題傾向についても検討したが、3才時には母に対するClinging(赤ん坊様)と対人緊張の強さ(社会性なし)のみが比較的明瞭に把えられた。

#### a. 検討項目の頻度および3才から5才への推移

1. 排泄習慣：3才時排泄習慣未完成者は軽度のものまで含めれば半数に近い多数となる。(重度20名、軽度24名)。その中 $\frac{1}{4}$ (11名)が5才時までで持続するが3才時の完成者からは5才遺尿児は出現しない。5才時への持続の割合は軽重両未完成群間に差がない。頻度のみを見れば3才時習慣未完成を発達上の歪みとは考え難いが、臨床的に明らかな問題である5才遺尿への高い持続率は重視される

べきである。

2. 口唇愛行動：3才時に14名あったが、5才時にもそれほど減少せず、3才時からの持続率は高い。この現象も5才時には臨床的な問題となる可能性は高いことからこの高い持続率は重視されよう。

3. 身体玩弄：3才時には8名あるが5才時には極めて少なく、持続性も低く、この現象が一過性のものであることがうかがわれる。

4. 他の項目の頻度は極めて低いが、吃音は3才時のみに、夜驚は5才時のみに認められていて各時点の発達への深い関連が暗示されている。

5. 態度上の問題傾向は3才時に比べ5才時にはより明瞭な問題傾向を持続・顕在化する者が多いが、対人緊張の強さは持続性が低い。

6. 3才時の各検討項目該当者の5才時の様態を見れば、(同一項目の持続性については上に述べたが)一般に3才時の検討項目該当者は、特に3才時排泄習慣重度未完成、口唇愛行動、吃音等のある者は5才時にその現象は消えた場合でも何らかの検討項目(多くは態度上の)に該当する傾向が強い。3才時排泄習慣軽度未完成、自慰等にはそのような傾向はない。従って前者の基調にある問題は後者のそれより重篤であり、該当検討項目自体はその問題の反映として、又両時点での現象形の相異は年令による表現形の違いとしてうけとめられよう。

b. 5才時に、明瞭な現象形として、しかも病理性負荷の可能性のある問題として (1)多動、注意散漫な抑制欠如 (2)過敏強迫的傾向が抽出された。これらが3才時には抽出されていなかったことに関連して、3才時の現象形への還元を行ない、これを3才時にいかに把えるかを検討した。抑制欠如児の3才時には対人的な緊張不安の弱さによると思われる(馴れ馴れしさ、愛嬌など)特徴的な現象が見られており、過敏強迫的児童は3才時にこだわり、潔癖等と、母子分離不安などの特徴があった。以上から3才時の現象形の中に、視点のおき方仕方での問題の萌芽を認めうることが分る。又、(前述した)その持続性にも関連して、3才時の対人的緊張はその強さより弱さこそ問題視すべきことも分る。

(B) 母子関係：児童の情緒発達に母子関係は重大な影響を持ち、それぞれの歪みが深い関係を持つことも明らかであるが、従来の知見には児童の問題に関するのと同様な方法論的な問題がある。筆者は児童の問題と平行して母子関係を把え、その関連を検討した。

a. 受診場面で母が子に対する態度を保護、規制の二面から評価した。(1)3才、5才時点で、子の検討項目該当と母の態度の偏りとの間には高い相関が認められ、二時点での母の偏りの消長と子の該当との間には呼応性が認められた。(2)3才時排泄習慣重度未完成や口唇愛行動は母の偏りとの呼応性が特に大きく、前述したこれらの現象の基調にある問題が母子関係の偏りに関連した重篤なものであることの可能性を示している。

b. 母子関係を更に多面的に検討したが、一般に3才5才時に児童の問題との関連が最も大きいのは母の放任態度=母子結合の稀薄さであった。これは特に排泄習慣重度未完成や抑制欠如児に多い。又、口唇愛行動に母子関係の偏りに由来する口唇欲求の挫折体験が、過敏強迫的な子の母には、不全感に基く極めて特異的な態度が見られた。以上のような母子の問題の不可分な関係は、幼児期に児童の現象のみからは把えがたい問題も、母子関係の力動の上に把えようとするなら、その病理性負荷の可能性や発展の方向を予測して把えうるであろうことを示している。

## 〔総括〕

幼児期の情緒問題とされる諸現象の追跡を行なって以下の結論を得た。

1. 3才時の排泄習慣未完成はそれ自体発達上の歪みとは云いがたいが、5才時の遺尿への持続性は、その未完成程度に拘らず高い。そしてその重度未完成は母子関係の偏りに関連して、発達上の歪みの帰結としての可能性、将来への発達の影響の可能性ともに高い。
2. 3才時の口唇愛行動の5才時への持続率は高く、情緒的な病理性負荷の可能性は、排泄習慣重度未完成のそれと同様に高い。
3. 3才時の自慰その他の身体玩弄は一過性の現象であり、後の発達への影響は認め難い。
4. 5才時の臨床的な問題に関連しては3才時の対人的な緊張はその弱いものの方が強いものより重視されねばならない。
5. 幼児期の情緒問題は母子力動の中でこそその意味がより明瞭に捉えられる。そしてこのような母子関係は健診場面でも捉えられる。

## 論文の審査結果の要旨

近年、児童福祉法に基く3才児健診に精神医学的立場からの参加が要請される。しかし、幼児期の情緒問題に関する従来の知見は、方法論的に多大の制約を持ち、予防医学的観点から問題を捉えようとする際に拠り所としうるものは乏しい。

本研究は、現行3才児健診類以の状況設定下で、同一児童の3才、5才、2時点で、追跡的に健診を行ない、同時にその状況下で母子関係の評価を行なって児童の問題との関連を追求したものである。

その結果、暦上の3才児において、従来emotional problematic itemsとされる現象がいかなる意味を持つかが明らかにされ、同時に、児童の情緒問題が母子関係のあり方に重大な関連を持つことが実証された。

ここに用いた方法論と、その結果得られた知見は、3才児健診にたゞちに還元し得る点、本研究の実践的意義は大きい。